

ラジオと手紙

「つなぐ」アート

Radio and Letters : “Connecting” Art

○中村正¹⁾, 早川岳人²⁾, 西村遥加³⁾

Nakamura Tadashi, Hayakawa Takehito, Nishimura Haruka

立命館大学¹⁾, 立命館大学²⁾, 京都コミュニティ放送³⁾

Ritsumeikan University¹⁾, Ritsumeikan University²⁾, Kyoto Community Broadcasting³⁾

Key words: community radio, social connections, social designing

京都コミュニティ放送はコミュニティの活性化をめざして2001年9月に設立されました。日本初のNPO放送局「FM79.7MHz 京都三条ラジオカフェ」です。番組を放送する市民は「番組オーナー」となり時間に応じた「放送利用料」を負担します。スポンサーは自分です。そうすることで市民が自由なテーマで放送できるようになります。新しいタイプの放送局です。番組オーナーは個人や企業から各種団体、大学、学生など多様な市民に広がっています。つまりマスメディアではとうてい実現できない自律的で自由な放送局を実現させたのです。地域限定の視聴エリアですが、インターネットを活用して世界に小さな声を届けることができます。可能性は無限大です。

ユニークな番組をもとにして「つながる」ということの意味を考えてみます。手紙をとおして知らないもの同士が関係をもつ、「つなぐ」アートのように活躍している番組です。ラジオというメディアの特性をいかんなく発揮しているともいえます。病院ラジオ、刑務所ラジオなど対人援助的にもユニークなラジオはありますが、また一味違うラジオのデザインです。

番組を聞きながら製作者と対話して、対人援助学的に検討します。一つ目は「深夜のお手紙ラジオ」です。中高年になった大人に過去の自分（高校生から25歳くらいの間）へのお手紙を書いてもらいます。内容は過去の自分へのアドバイスでも今だから言える失敗でも何でも良いのです。ゆっくり時間をとって考えてみることで生まれる思いを言葉にのせて書き記してもらいます。お手紙の書き手は手紙を書くことを通して過去の自分に思いを馳せる時間となります。聞き手は手紙の内容から気づきやメッセージを受け取り、自分の過去を思い出します。読み手は宛先の過去の自分と同じ年齢の大学生です。さらに画期的なことはその手紙の書き手が放送料を支払う

こととしており、そのつながりがとても個性的なのです。

二つ目は「拝啓 おじいちゃんおばあちゃん」です。京都の小学生がおじいちゃんおばあちゃんへの作文を発表します。実の祖父母ではない地域のおじいちゃん、おばあちゃんが感想を述べ、それらを放送します。子どもの視点は地域づくりのヒントになるという考えのもと、小学生が発表するおじいちゃんおばあちゃんへの作文とそれへの応答を通して、つながりをつくることになり、健康な地域づくりについて考察します。

両者とも手紙が鍵となります。それは不思議な宛先です。深夜のお手紙ラジオは、過去の自分に宛てた手紙です。それを現在の若者が読むのです。「拝啓 おじいちゃんおばあちゃん」はおじいさんとおばあさんへの手紙ですが地域の知らない祖父母世代の高齢者が応答してくれるのです。つまり、ラジオを媒体に知らない人同士が手紙をとおしてつながるというアートな実践です。地域で生きる力を育むのです。手紙を介し、小さなラジオを舞台にした、多世代を「つなぐアート」としての役割について考察していきます。

みなさんも番組つくってみませんかというワークショップです。

○番組です。事前にみて、聴いておいてください。

「深夜のお手紙ラジオ」

<https://radiocafe.jp/202308002/?intro=1>

放送日時 金曜日 0:30-0:33

毎月第4金曜深夜

「拝啓 おじいちゃんおばあちゃん」

<https://radiocafe.jp/201807003/>

放送日時 土曜日 8:00-8:06 ポッドキャストで聴くことができます。